

## エペソ書2章14-18節 「交わりの平和」

### 1A 敵意の壁の取り壊し 14-15a

### 2A 新しい人の創造 15b-16

### 3A 平和の宣教 17-18

#### 本文

今朝の聖書箇所は、エペソ書2章14-18節です。私たちは、香港で行われた東アジア青年キリスト者大会から昨日、帰ってきました。そこで受けた神の恵みを分かち合いながら、次から見ていく御言葉を眺めたいと思います。「14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。17 それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました。18 私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができるのです。」

「キリストこそ私たちの平和」これが、大会の主題です。日本と中国と韓国という三つの国は、歴史と文化の多くを共有する国々でありながら、近代においては対立が多く、今に至るまで政治的な緊張を抱えている間がらです。しかし、キリストに捉えられたそれぞれの国の若者たちが共に集まる時、主がなされる御業がいかに大きいかが、改めて思われます。まず、一つのビデオをお見せします。これを見れば、この大会が何をしようとしているか一目でお分かりになると思います。



ここは、香港の中心部にある教会で、私たち大会参加者が賛美「マラナタ」を歌った場面です。三つの言語で、主の再臨の希望を同時に歌います。私たちがイエス様にお会いする時に、私たちはちょうど、このような状況の中でお会いします。一つの国民、一つの国語で私たちは歌うのに慣れていますが、しかし、実際はあらゆる国から、あらゆる民族から、あらゆる言語からキリストの贖いを受けた人々が、一斉に主を賛美しているのです。「黙示 5:9-10 彼らは、新しい歌を歌って言った。『あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。』」

聖霊が初めて弟子たちに注がれた時に、覚えていますか、そこにはあらゆる国から祭りを祝うために来っていたユダヤ人がいましたが、彼らは弟子たちが、自分たちの国で使われている言語で神を賛美しているのを聞いて驚きあきれていました。それは、神の国の到来の前触れを表すものでありました。

そして、私たちは日中韓の兄弟姉妹が手をつなぎ、ともに主に向かって祈りました。祈る時も、私たちは知性で祈っていても、私たちの霊は同じ神に向かって祈っていることを知っているのので、そこには言葉が理解できなくても、霊で心を合わせて祈ることができることを体験できます。



主がアブラハムに対して語られた約束を思い出してください。「地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。(創世 12:3)」あらゆる民族がいることによって、そして神の祝福が満ちたものとなるのです。

### **1A 敵意の壁の取り壊し 14-15a**

そこで本文をもう一度眺めたいと思います。「14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。」まず、「キリストこそ私たちの平和であり」とあります。私たちはこの箇所をしばしば、自分の心の中の平安、思い煩いがない状態のことを指しているものとして読んでいます。しかし文脈は違いますね。これは、二者の間にある隔ての壁が壊された後にある結びつきの豊かさを表しています。聖書における「平和」というのは、争いや戦争のない状態だけを指しません。結びつくことによって、一つになることによって共有できる豊かさや繁栄です。その一つにされた時の喜び祝うこと、こうしたものが平和を構成しています。

ここに「敵意」とあります。これが、平和を享受できない原因であります。その敵意とは、初めに縦の関係から始まり、そして横の関係にまで波及しています。神が人を造られて、人が神と交わっていました。そこには神と人とが一つにされていた平和がありました。三位一体の神の中にも、その交わりの中に平和がありましたし、そして神と人との間にも平和がありました。それから、神は男から女を造られて、それで二人が一心同体となりそれで平和がありました。ところが、初めの人アダムが罪を犯しました。そこで敵意が入り込みました。神が近づいても、アダムもエバも恐ろしくなって逃げてしまったのです。「イザヤ 59:2 あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」私たちの罪が神との仕切りを作りました。そして、神の律法によって、その罪が明らかにされ、私たちは神の前で有罪であると定められています。

しかしキリストが、その敵意を取り除いてくださいました。ご自分の肉体において神の罰を受けてくださいました。それゆえに、神と私たちの間にある仕切りが取り除かれました。十字架の上にイエス様が架けられている時に、「神殿の幕が上から下まで真二つに裂けた。(マタイ 27:51)」とあります。至聖所に住まれる聖なる神と、私たちの間を仕切る幕を神ご自身が、裂いてくださいました。キリストの裂かれた肉体、流された血によって神との平和を持つことができるようになりました。

この十字架による平和があつて、それでもう一つのことが起こりました。横のつながりです。二つの者、その間に隔ての壁があつた者たちを一つにする平和が与えられます。ここでは、この二つは具体的には、ユダヤ人と異邦人ですが、両者の間にあつた敵意をキリストの十字架が取り除きました。ユダヤ人と異邦人だけでなく、あらゆる区別の中にある隔ての壁をキリストは取り除かれました。「ガラテヤ 3:28 ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。なぜなら、あなたがたはみな、キリスト・イエスにあつて、一つだからです。」この約束はもちろん、その区別がなくなったということではありません。私はキリスト者となつても、依然として男であり、男であることがなくなることでありません。しかし、男女の間にある差別、その隔ての壁は、キリストの前ではすべてが罪人であり、すべてがキリストの十字架によって罪赦され、そこにおいて差別はなく、私たちは一つにされています。

私たちキリスト者の集まり、教会が、いかに独特な存在なのかを、神学者である D.A.カーソンという人がこう言いました。「教会が、自然体の「友」によって成り立っていないのが理想です。元々、普通には敵同士でできています。私たちを一つに結びつけるのは、共通の教育、共通の人種、共通の所得水準、共通の政治、共通の国籍、共通の訛り、共通の仕事、どんな物でもありません。キリスト者は共に集まるのは、自然に連なるものではなく、イエス・キリストによって救われ、この方に共通の忠誠を負っているからです。この共通の忠誠に照らして、イエスご自身にみな愛されているという事実

に照らして、イエスが言われることを行なうように献身しています。そしてイエスは、互いに愛せよと命じられています。この点において、この人たちは普通なら敵である者たちが

イエスのゆえに互いに愛し合う団結、仲間なのです。」<sup>1</sup>

## **2A 新しい人の創造 15b-16**

そして 15 節の途中から読みます。「15b このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。」

今、見てきましたように、私たちは全く新しい共同体の中に入れられています。これまで存在していた、仲間や団体、家族などのつながりでは決して説明できない、ただイエス様に愛されたという理由だけで互いに愛するという神秘的なつながりの中に生かされています。。ここでの「新しいひとりの人」というのは、「新種の」という意味です。ですから、自然体では決してつながることはできず、ここにあるように、「造り上げ」るものであり、平和は自然にはできるものではなく、「実現する」ものなのです。

では、どうすれば私たちは、この新しい人を造り上げることができるのでしょうか？ 第一に、「礼拝する」ことです。礼拝することが、いかに私たちの知性や言語、儀式や作法をはるかに超えたものであるかは、イエス様ご自身が語られたことです。「ヨハネ 4:23-24 しかし、真の礼拝者たちが霊とまことによって父を礼拝する時が来ます。今がその時です。父はこのような人々を礼拝者として求めておられるからです。神は霊ですから、神を礼拝する者は、霊とまことによって礼拝しなければなりません。」真理に基づいて礼拝しますが、霊によっても礼拝します。私たちが生まれつき与えられた知性を超えたところで、礼拝します。

ですから、私たちは次のことを経験します。言葉が通じ合わなくても存在する一体感です。例えば、海外旅行に出かけて、その国の教会の礼拝に参加したことのある人は気づきます。言葉が通じ合わないのに、なぜかそこに自分がつながっている、「兄弟姉妹」なのだという実感が与えられます。実にこのことが言えるのです。不信者の日本人と、信者である韓国人と私たちはどちらにつながりをより感じるでしょうか？あるいは不信者の日本人と、信者である中国人に私たちはどちらに一体感を抱くでしょうか？どちらですか？言葉が通じなくても、民族や国が違っても、時には敵対しているとみなされている相手であっても、言葉が通じて、共通点が数多くある者よりも、全く異なる次元でつながっていることを知ることです。これは、知性ではなく、御霊によって悟ることのできる領域です。

そして礼拝を捧げるということは、神を王としてみなし、礼拝するということです。そこは、人間の国ではなく、神の国が広がるということです。どんな関係よりも、キリストとの関係が上位にあります。この方への愛がどんな関係よりも上にあります。自分の献身や忠誠は、自分の所属している

---

<sup>1</sup> <https://www.facebook.com/thegospelcoalition/posts/10153097782452723>

家族や団体、国よりも、さらに上位に神の国があります。イエス様が御言葉を語られている時に、マリヤや他の肉の兄弟たちがイエス様を呼びました。しかしイエス様はこのように答えられます。「マルコ 3:34-35 そして、自分の回りにすわっている人たちを見回して言われた。「ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。神のみこころを行なう人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです。」これが、礼拝によって示していることです。私たちの忠誠が、他にある最も強い忠誠よりも強いのです。

ですから、礼拝によって新しいひとりの人を造り上げます。二番目に、「信仰」が必要です。この共同体は自然ではないことを話しました。したがって、言い換えれば不自然なのです。これまでの古い習慣を、キリストにあって新しい習慣に変えていく、その個人的な営みがあるのと同じように、新しい共同体の中で自分とは元々は距離のある人と、キリストにあってつながっていくことが必要になってきます。信仰とは、目に見えないけれども行動に移すことです。信仰とは、これまで自分が感じ取ってきた状況、ここまでだったら安心できるというような範囲を超えて、自分のものを捨ててキリストを選び取っていくことです。例えば、この大会に来る人はみな、信仰の一步を踏んでいました。大会でどんなことをするのか？想像がつかないからです。前もって調べようにも、調べようがないのです。同じように、私たちは新しい共同体に入っているのです、信仰を働かせて交わります。

そして三つ目に、「愛の忍耐」が必要です。「エペソ 4:2-3 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。」新しく一つになる平和を持っていますが、私たちには成長が必要です。神の恵みによって成長し、自分と違うこと、そのような人々を、忍耐をもって受け入れていく必要があります。心がキリストにあって広がっていることが必要です。途中で気が合わないということであきらめてしまえば、キリストご自身の目的を失ってしまいます。主は、私たちが成長してほしいと願っておられます。

そして四つ目、最後に「希望」が必要です。「この希望は失望に終わりません。(ローマ 5:5)」とあります。私たちは、信仰によって忍耐する、愛をもって忍耐するという中で、希望をもって忍耐していくことが必要です。まだ見えない将来ですが、主が必ずそうすると約束してくださっていることがあります。先ほど読みました、黙示録 5 章にある天における賛美には、あらゆる国民や国語、民族から、キリストの血によって贖われた民が新しい歌をうたっている姿がありました。しかし、私たちは、現実には国と国が対立し、社会と社会が、個人と個人が対立する時代に生きています。今、私たちが面している最も大きな敵は、無関心です。人に対して恐れを抱き、壁を作っています。このような現実を見ると、自分はもうだめだと感じます。しかし、神の与えられた希望があるのです。したがって、これを失ってはいけない。必ず与えられるという信仰をもって、さらに前を向いて進みます。

日本人の魂の救いは、希望を抱いた祈りによって支えられています。希望が見いだせないような時に希望を抱いて、祈られてきました。以前お話したように、戦時中、日本軍がまだ中国にい

るような時に、その収容所で若い男の子たちが祈りました。今、同じように中国や香港で、日本人の魂の救いのために祈っている兄弟姉妹がいます。クリスチャンの人数が少ないことを知って、それで無関心を悔い改め、涙を流して祈っている姿を見ました。そのあきらめない祈りによって、これまで福音に触れなかった人が触れるようになっていきます。

そして 16 節を見てください、「両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させる」とあります。両者が一つの体になって、それで十字架によって神と和解させます。個人として、神と和解するだけでなく、体において神と和解します。これは、聖餐式において味わうことができます。私たちが、それぞれが自分の罪を告白します。自分が他者に対して抱いている敵意や偏見、冷たくなっている心、こうしたものがあれば聖餐にあずかることができません。なぜなら、同じパンにあずかり、同じ杯にあずかる自分はその相手とつながっているからです。キリストにある一体、その平和のつながりがあるからこそ、キリストの体と流された血にあずかることができるのです。そして、互いに愛し合っているという命令に従っています。

### **3A 平和の宣教 17-18**

このようにして、敵意をキリストが壊し、新しい人に作り出されました。そして 17-18 節は、「宣べ伝える」ことです。17 節に「それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました。」とあります。平和を宣べ伝えるのですが、宣べ伝えるということには、二つの要素があります。一つは、「宣言する」ということです。相手と議論するものではありません。ただ主がこう言いなさいと命じられていることを、宣言します。それゆえ、そこには主の権威が現れます。十字架の言葉には、力があります。御霊が働きます。私たちのしなければいけないことは、宣言することです。そして、宣べ伝えることにおいて大事な二点目は、「出ていく」ことです。何かを宣言する時は、まだそのことを知らない人々に伝えに行きます。ですから、自分の知っている範囲、自分が快適なところから出ていかなければいけません。

ここに、近くにいた人々と、遠くにいる人々の二つが書かれています。近くにいる人々とは、イスラエル人のことです。神の契約や約束が与えられているけれども、それでもキリストがその成就であることを知らない人々のことです。そして遠くの人々とは、神から遠く離れている人々です。神やキリスト、教会とは離れているであろう、程遠い人々のことであります。しかし、この平和を遠い人々にも伝えていくのです。これが私たちの宣教であります。「私は、そんな程遠い人々には届くことはできない。」と感ぜられるのであれば、どうか自分を思い出してください！自分自身が、どれだけ神から遠く離れていたかを思い出してください。そうすれば、主の手が届くことのできない、それ以上遠いところはないことを知ることはできるはずですよ。

私たちは、この平和を宣べ伝えるために一つにされています。そのために、一つ霊において父を礼拝しているのか？この交わりをどれだけ楽しめているのか？この使命にどれだけ生きがいを感じているのでしょうか？